



会員彼は是

中国地方 観音寺霊場めぐりの旅

岡 和良（会員）

中国地方、岡山・広島・山口・島根・鳥取の五県にわたって点在する観世音菩薩をご本尊とし、我が国の千年余の歴史を今に伝える古寺・名刹を、平成二十九年七月九日から七日間、巡礼する旅を続けた。

一行は、伊藤正博・雨宮武・石川薫・岡和良の四名で、平均年齢八十三歳の老人グループ。神奈川県大和市から現地往復と、寺から寺への移動は、すべて雨宮氏運転のマイカーによりスムーズに行われ、その走行距離は二七六〇キロに達した。マイカーのお蔭で効率的に移動できた。一人でハンドルを握り、安全運転を続けてくれた超人・雨宮氏に、心から感謝しお礼申し上げたい。

梅雨末期で雨が心配されたが、初日に少し降られただけで、その後は傘不要の旅を続けることができた。観音様が我々

の心意気を感じて、雨雲を吹き飛ばしてくださったのだろうか。

我々は、略式ながら白衣に袈裟掛けの井出^{いで}ちで寺を訪れ、ご朱印を戴くと共に、本堂に参拝、般若心経^{はんにゃしんきやう}を読経させていた。

遠路、東京からの参拝というためか、どの寺院でも我々は暖かく迎えられた。住職の方々との懇談、写真撮影などを通じて、我々は心暖まる交流ができ、思い出に残る旅になった。

深山の大樹に囲まれ、静まり返った境内の霊気、極楽浄土を思わせる蓮の花、湧き出る清水とせせらぎ、静寂を揺るがすような蝉時雨など、我々は心洗われる思いに浸りながら、そして観音様のご慈悲を背中に感じながら、さらに充実感を胸に畳んで、山陽及び山陰地域の第一番札所から第三十三番札所の三十三か寺と

特別霊場四か寺に、五木寛之の『百寺巡礼 第8巻 山陽・山陰編』の四か寺を加えた四十一か寺を巡礼したのである。

〈七月九日〉

朝早く小田急・相模大野駅近くをスタート。東名高速など高速道路を、一路岡山へ向かう。梅雨末期ということ、途中、雷雨に襲われるなどしたが順調に走行。予定時刻に到着し、観音寺めぐりの旅が始まった。

第三番札所 正楽寺（岡山県備前市）

高野山真言宗 開山・七四九年

山の緑、土塀の白壁と竹林の静けさ、そして重厚な寺構え。仁王門「雲と波」の彫刻は、鎌倉時代の面影を残す。

住職は、大僧正・福田寺全巨氏。丁寧に対応して頂く。

第二番札所 余慶寺（岡山県瀬戸内市）

天台宗 開山・七四九年

雨が上がり、雲の切れ間から日差しが射し込む。吉井川を見下ろす小高い丘の上にあり、本堂前に鉢植えの蓮の花が、古刹を包み込むように咲いていた。

第一番札所 西大寺（岡山県岡山市）

高野山真言宗 開山・七七七年

荘厳な造りの本堂内陣、千手堂の天井絵などは必見といわれる。

守護札を揮一つの男たちが奪い合う裸祭りは、三大奇祭の一つとして有名。
第五番札所 法界院（岡山県岡山市）

真言宗 開山・七二九年頃

ご本尊・聖観音は、桧の一本一体の稀有な霊像で、平安初期の貴重な作とされる。

岡山は瀬戸内海の気候に恵まれて花開いた吉備文化圏の中心で、水陸交通の要衝。池田三十一万五千石の城下町。
橋本春峯住職から詳しい説明を受ける。

〈七月十日〉

特別霊場 誕生寺（岡山県久米南町）

浄土宗 開山・一一九三年

法然上人降誕の聖地。全浄土教徒の魂の故郷と敬仰される。

境内に、産湯の井戸、歴代住職の墓、樹齢八六〇年の大銀杏、そして苔の参道とせせらぎに、心洗われる。

第四番札所 木山寺（岡山県真庭市）

高野山真言宗 開山・八一五年

標高四三〇メートル、老杉茂る静寂な境内は、深山の靈気に包まれる。自然保護地域に指定されている。

開山当時、流行した疫病を退散させて、信仰が深厚になったと伝えられる。

深山を揺るがすような蟬時雨が印象的。



第四番札所 木山寺（左から、岡、石川、伊藤、雨宮）

第六番札所 蓮台寺（岡山県倉敷市）

真言宗 開山・七三三年

厄除け総本山として、権現さまの靈験あらたかで、瀬戸内隋一のお詣り所として栄える。右手に大剣を持ち、睨みをきかず権現さまに、暫し見とれた。

第七番札所 円通寺（岡山県倉敷市）

曹洞宗 開山・一六八八年頃

良寛和尚が二十二歳から十一年間修行した寺で、その後、全国を行脚し聖僧と慕われた。境内に良寛の像がある。寺域

一带は県指定の公園で、すこぶる景勝の地である。

第八番札所・五木寛之八〇 明王院（広島県福山市）

真言宗・大覚寺派 開山・八〇七年

弘法大師が開いたと伝えられる。時代を先取りした斬新な意匠の本堂と五重塔は国宝。身代り観音として、今も多くの入々から信仰を受けている。

第十一番札所 向上寺（広島県尾道市）

曹洞宗 開山・一四〇〇年

瀬戸内海の生口島にあり、災害鎮圧と興隆繁栄の祈願寺として崇敬される。国宝の朱塗りの三重塔が異彩を放つ。梵鐘の音色は、除夜の鐘として全国に放送される。

寺院周辺の巨岩に先人達の句が刻まれており「文学の小径」となっている。

第九番札所・五木寛之七九 浄土寺（広島県尾道市）

真言宗泉湧寺派 開山・六一六年

聖徳太子によって創建され、身代り観音として信仰される。高野山と深い縁がある。

瀬戸内海有数の良港・尾道は、古くから交通・経済の要衝で、当山は公武両面から重要な拠点だった。

多宝塔は国宝で、日本三名塔の一つ。

特別霊場 西国寺（広島県尾道市）

真言宗醍醐派 開山・七二九年頃

長さ約二メートルの小草履の仁王門は、観光尾道のシンボル。百八段の石段、幕末を語る大方丈と華麗な伽藍、転じて眼下の尾道水道など、絵巻が展開される。弘法大師の霊跡として多くの人を迎える。

第十番札所 千光寺（広島県尾道市）

真言宗単立 開山・八〇六年

海拔百メートルに位置し、眼下に尾道水道、瀬戸内海の島々、遠くに四国の連山を望む素晴らしい景観。

尾道の名刹、浄土寺・西国寺・千光寺の三寺は、過日のNHKのプラタモリの番組で放映された。

「火伏せの観音」と称せられ、火難除けに霊験あらたかだったと、伝えられる。今は諸願成就の観音様として、参詣者が絶えない。鐘楼の鐘は、除夜の鐘として広く親しまれ、尾道名物の一つになっている。

七月十二日

第十二番札所 佛通寺（広島県三原市）

臨済宗 開山・一三九七年

巨大な千年杉が林立し、鬱蒼と茂る樹海の中に仏閣が佇み、厳しい禅寺の気魄が漂う臨済宗の大本山。開山禅師の佛通

禅師と大通禅師の尊像が塔所に端座して、古刹の今を見守っている。

第十三番札所 三瀧寺（広島県広島市）

高野山真言宗 開山・八〇九年

広島県の原爆犠牲者慰霊のため、多宝塔が和歌山県の広八幡神社から移築され、八月六日に慰霊法要が行われる。

境内は深山幽谷の風情があり、瀬音を聞きながら苔むす参道を歩くと、沢から迷い出た蟹に出逢い、思わず微笑む。広島市民の安らぎの聖地、心の故郷となっている。

曾ては、多くの修行僧が滝に打たれ、岩窟で禅定に入ったと言われる。

第十四番札所 大聖院（広島県宮島）

真言宗御室派 開山・八〇六年

厳島神社の別当寺として祭祀を行っていた厳島の総本坊。厳島には多くの観光客が訪れて賑わっているが、その奥にある大聖院を訪れる人は少ないようだ。

広島から海を往復する観光船と、参道で人と戯れる鹿は、気持ちと和らげられる。

特別霊場 般若寺（山口県平生町）

真言宗御室派 開山・五八六年

用明天皇（聖德太子の父）の皇子時代の、絶世の美女・般若姫との悲恋が、開山の背景にあって、姫の菩提を弔うため

に創建された、といわれる。

境内にある聖德太子鞭の池は、太子が全国巡幸の折、父の墓参に当山を訪れた時に、供養のため掘られたことで有名。

七月十二日

第十五番札所 漢陽寺（山口周南市）

臨済宗南禅寺派 開山・一三七四年

境内の側溝の清流に、心洗われる。池に泳ぐ鯉の群れも清々しい。

「曲水の庭」に代表される平安時代のさまざまなタイプの庭園と精進料理は好評で、訪れる人多く、マスコミにも紹介される。

五木寛之七八 阿弥陀寺（山口県防府市）

華嚴宗 開山・一一七八年

東大寺が火災により焼失した際、当寺を創建した俊乗坊重源上人は、この地の巨木を伐採して水路奈良へ運んで再建したという。境内に、当時作業人が汗を流したという湯屋と、上人が腰掛けたといわれる石が、霊石として残されている。

第十八番札所 宗隣寺（山口県宇部市）

臨済宗東福寺派 開山・七七七年

唐より来日した為光和尚が、故国に似た景観と、山麓の湧泉の靈感に惹かれて寺を創建した。

境内整備工事の際、発見された朝鮮鐘

は国の重要文化財。また宗隣寺庭園は、深淵な禅の真髄を説く閑寂な趣きで、国の名勝庭園に指定される。

第十九番札所 巧山寺（山口県下関市）

曹洞宗 開山・一三二〇年

高杉晋作が、八十人の奇兵隊を率いて義兵の旗揚げをした明治維新発祥の地。彼の騎馬像が天空を睨んでいる。維新から一五〇年、晋作は今の世を如何に見るだろうか。

第十七番札所 龍蔵寺（山口県山口市）

真言宗御室派 開山・六九八年

本尊は馬頭観音。雪舟筆の絵馬額や十三頭の大絵馬のある絵馬寺。

滝壺に落ちる水音から鼓の滝と名付けられた三段の滝、その飛沫が樹齡千年の大銀杏を育む。

第十六番札所 洞春寺（山口県山口市）

臨済宗建仁寺派 開山・一五七二年

約二百年間、中国地方を支配した大内氏に代わった毛利家の初代・元就の菩提寺。毛利家の栄枯盛衰を見る思い。

晩年の元就は、戦乱に果てた兵士を、敵味方の別なく供養し、法要は欠かさず続けられているという。

五木寛之七七 瑠璃光寺（山口県山口市）

曹洞宗 開山・一四七一年

五重塔は、奈良の法隆寺、京都の醍醐

寺と並ぶ日本三名塔の一つに数えられ、国宝。

青空に向かって屹然と聳える美しさは圧倒的、魅力的。



〈七月十三日〉

第二十番札所 大照院（山口県萩市）

臨済宗南禅寺派 開山・一三三四年

関ヶ原の戦いに敗れた毛利家は、居城を広島から萩に移し、以後、明治維新までの約二六〇年間、十三代の藩主を数える。

城下町・萩は、武家屋敷など江戸時代の面影をよく残し、また、幕末・明治維新期に多くの人材を輩出した地として知られる。

萩に築城後の毛利家の藩主は、偶数代は大照院に、奇数代は東光寺に、交互に

葬られている。大照院には、七代の藩主夫妻が、家臣寄進の六〇三基の石灯笼に護られ静かに眠る。

第二十一番札所 観音院（山口県萩市）

臨済宗建仁寺派 開山・一五五八年

河口の高台に位置し、眼下に日本海を、正面に萩城址を望む。海上安全・水難防止観音と崇められ、海難犠牲者の慰霊碑が冥福を祈っている。

五木寛之七六 東光寺（山口県萩市）

黄檗宗（開祖は中国の隠元和尚） 開山・一六九一年

毛利家の墓所に整然と並ぶ約五〇〇基

の石灯笼に目を奪われるが、当時の藩主の死に際し家臣の殉死する風習を禁じ、家臣に石灯笼を献上させることにしたことに由来するものといわれる。亡き君主に自分の命を捧げるという思いが、多数の石灯笼にこめられているわけで、肅然とさせられる。

五木寛之七五 永明寺（島根県津和野町）

曹洞宗 開山・一四二〇年

津和野町は、緑の山並みに囲まれ、津和野川に沿って街並みが作られ、側溝の清流に鯉の影が……という、静かで美しい城下町、小京都と呼ばれる。この地に生まれた明治の文豪・森鷗外（林太郎）が、茅葺き屋根の当寺の墓地で静かに眠る。



第二十二番札所 多陀寺^{ただじ}（島根県浜田市）

高野山真言宗 開山・八〇六年

奇岩と白砂が広がる山陰海岸・石見路を代表する古刹。

浜田海岸や石見畳ヶ浦の絶景が一望できる小高い山上に位置する。

山陰海岸の落日の、得も言われぬ美しさ、荘厳さは定評がある。

仁王門の傍に樹齡千年、天然記念物大楠が聳え、また、何処から流れ着いたのか、二十七体の流木仏が本堂に眠る。

出雲大社

早朝の、他に人影の無い爽やかな参道を歩き、清々しい気持ちで出雲大社に参拝。心洗われる思いに浸った。

第二十三番札所 神門寺^{かんとじ}（島根県出雲市）

浄土宗 開山・七八一年

出雲市最古の寺院で、巨木の森に囲まれた広大な寺領は、未知のロマンを秘める。

弘法大師が、この寺から「いろは四十八文字」を全国に広めたことから、別名「いろは寺」と言われる。

第二十四番札所 禪定寺^{ぜんじやうじ}（島根県雲南市）

天台宗 開山・七二九年

峻しい山の自然の中に建ち、山並みの眺望がすばらしく、蟬時雨が古寺を包む。

中国・普陀山から中国の観音像が、我が国の中国地方の観音古刹三十七か寺に贈られたとのこと。日中の交流が一一〇年も昔に行われていたことに驚かされる。山寺の創建は、苦行修練の道に、菩提心を養うことが信仰の世界、との考えに基づいたものだった。

第二十五番札所 鰐淵寺^{がくえんじ}（島根県出雲市）

天台宗 開山・五九四年

鎌倉時代、武家との関係を密にして出雲大社との習合を確立し、別当寺を務めた。

深山幽谷、長く峻しい石段を登る。

弁慶は、当寺で十八歳から三年間修行したと言われる。八百屋お七もひっそりと眠る。

せせらぎの清流に、山女の影を見る。

第二十六番札所・五木寛之七四 一畑寺^{いちばてい}（島根県出雲市）

臨済宗 開山・八九四年

「目の薬師さま」として、全国的な信仰の広がりを持ち、境内は賑わっている。

標高三〇〇メートルの山上に位置し、眼下に宍道湖を、遠くに中国地方の山並みを一望できる。

第二十七番札所 雲樹寺^{うんじゅじ}（島根県安来市）

臨済宗 開山・一三二二年

通称「子授け観音」多くの信仰を集める。

中国・普陀山から贈られた観音像と朝鮮鐘（国の重要文化財）に、当時の海外交流が偲ばれる。

第二十八番札所・五木寛之七三 清水寺^{きよみづでら}（島根県安来市）

天台宗 開山・五八七年

東に霊峰・大山を望み、西に八雲の峰々が連なる景勝の地。千年杉に囲まれる境内の井戸から湧き出る清い水……「清水寺」の由来といわれる。山陰地方唯一の三重塔。

商売繁盛、病氣平癒、家内安全の観音様として賑わう。

第二十九番札所・五木寛之七二 大山寺^{だいせんじ}（鳥取県大山町）

天台宗 開山・七一八年

修験道の道場として栄え、室町期には多くの僧兵をかかえ、比叡山、吉野山、高野山に劣らない程隆盛を極めたという。

中国地方で一番の高山・大山（日本百名山の一つ）の中腹にあり、日本一長いといわれる自然石の参道を登る。大館住職は我々を本堂に招き、般若心経に合わせて木魚を叩いてくれた。

第三十番札所 長谷寺（鳥取県倉吉市）

天台宗 開山・七二一年

日没近い参道の石段を、約三〇〇メートル登る。暗くなると、猪が出没することもあるとか……。山麓は公園になっていて、春には花が咲き乱れる。

第三十一番札所・五木寛之七一 三佛寺（鳥取県三朝町）

天台宗 開山・七〇六年

標高九〇〇メートル、原生樹海に覆われる三徳山山麓に建つ。修験道の行場として開山されたのが始まりとされ、断崖絶壁の中復にしがみつくよう建つ国宝・投入堂は、日本最古の懸崖造りで、日本的な美を表す建築として知られる。誰がどのようにして建てたのか、今も謎が残る（時間の関係で現地を見ることができなかった）。

住職夫妻が本堂に我々を招き入れて下

さって読経、写真撮影にも快く参加頂いた。

〔七月十五日〕

特別霊場 摩尼寺（鳥取県鳥取市）

天台宗 開山・八三四年頃

三〇三段の急な石段を喘ぎ喘ぎ登る。両側の繁みに安置され、菩薩の功德を授けるといふ石仏は目に入らない。

市内の幼稚園児五〇人位が、元気よく



石段を登ってきた。座禅体験のためとのこと。元気な園児が羨ましかった。

山頂の奥の院には、多くの遺跡があるほか、亡き人の霊魂が集まると信じられてきた。

第三十二番札所 観音院（鳥取県鳥取市）

天台宗 開山・一六三二年

名勝に指定される林泉公園が有名で、池を囲む四季折々の眺めは絶景。

ご本尊の観音さまは出世観音と崇められ、霊験あらたなることから、善男・善女の手厚い信仰を集めている。

第三十三番札所 大雲院（鳥取県鳥取市）

天台宗 開山・一六五〇年

「中国観音霊場めぐり」結願寺。

本堂中央に鎮座する阿弥陀三尊、それを取り巻く形で中国観音霊場の観音像三十三体が並び、極楽浄土を表現した様は圧巻で、結願寺としての風格に感動を覚える。

仁王門の彫刻見上ぐ蝸牛（正楽寺）

雨上り本堂つつむ蓮の花（余慶寺）

裸祭札奪い合う熱気かな（西大寺）

城下町栄えし文化夏の蝶（法界院）

高僧の生れし聖地や夏椿（誕生寺）

深山の霊気揺るがす蝉しぐれ（木山寺）

厄除けの権現さまや梅雨晴間（蓮台寺）

修行せし良寛像や夏木立

(円通寺)

万緑の五重塔や鳶の笛

(明王院)

三重塔浮かべる夏の瀬戸の海

(向上寺)

身代りの観音の笑み南風かな

(浄土寺)

老鷺大わら草履仁王門

(西国寺)

眼下に瀬戸遠くに四国雲の峰

(千光寺)

木下闇今を見守る禅師像

(佛通寺)

参道や沢蟹迷ひ歩きをり

(三瀧寺)

鹿の子も人波のなか厳島

(大聖院)

遠き日の悲恋を今に蝉の声

(般若寺)

清流の巡る寺領や梅雨晴間

(漢陽寺)

紫陽花や巨木伐採夢の跡

(阿弥陀寺)

海わたり朝鮮鐘や夏つばめ

(宗隣寺)

明治維新旗挙げの地や夕焼雲

(功山寺)

滝しぶき樹齡千年大銀杏

(龍蔵寺)

武将らの眠る菩提寺蝉しきり

(洞春寺)

夏空を独り占めして五重塔

(瑠璃光寺)

武家屋敷昔を今に風薫る

(大照院)

海難を繰返すなとあいの風

(観音院)

(あいの風) 春から夏にかけて日本海岸

沿いに吹くそよ風

石灯籠主従の絆虹の橋

(東光寺)

鵲外や墓地に寄り添う時鳥

(永明寺)

落日や金波寄せくる夏の海

(多陀寺)

玉砂利や心洗わる夏の朝

(出雲大社)

道おしえ四十八文字いろは寺

(神門寺)

普陀山から観音像や虹の橋

(禅定寺)

透き通る山女の影や清水湧く

(鰐淵寺)

宍道湖や賑わう薬師夏つばめ

(一畑寺)

子授けの観音いまに夏の雲

(雲樹寺)

霊峰を望む名利清水湧く

(清水寺)

山滴る般若心経木魚かな

(大山寺)

暮れなずむ石段嶮し仏法僧

(長谷寺)

絶壁の投入堂や夏涼し

(三佛寺)

夏の朝三百段の試練かな

(摩尼寺)

境内の静寂を映す夏の池

(観音院)

紫陽花や観音めぐり結願す

(大雲院)

旅を終えて

お誘いを受けて何の躊躇いもなく参加させていただいたけれど、年齢的には九十歳間近かの老人、正直、体力的に、また、もの忘れなどに一抹の不安がないわけではありませんでした。しかし、同行の皆様の心遣いやお力添えに助けられて、旅を終えることができました。心から感謝し、お礼を申し上げたいと思います。

四国のお遍路さんのことを耳にしていきましたが、このトシになって、それと同じような体験をすることになるうとは……。白衣を身に纏い、袈裟掛けの出立ちで古刹に参拝することも、般若心経を読経することも初めてでしたが、見様見真似で、外見だけは何とかなったかも知れません。

最初は形だけだったけれど、回を重ねるごとに、静まり返った霊気の中で、私の心が洗われるような気持ちのみならず、充実感も感じられるようになりました。

目には見えない不思議な力が働いたのでしょうか。汗だくになりながら、喘ぎながら登った最終日の摩尼寺の三百段の石段……途中で小休止した時、私は不思議な体験をしました。何と、疲れ果てて引き摺るように石段を登っていた私の脚が、それを忘れ去ったかのように突然軽くなったのです！ それからは別人のように、足取りも軽く、残りの石段を登ることができました。

理由は分かりませんが、体力的に限界に達すると、不思議な力が湧き出ることがあるのでしょうか。この時、「修行」という言葉が脳裡を駆け巡るのを覚えました。

七日間、東京から山口まで二七〇〇キロの長い道程を、お一人でマイカーを運転して、四十一か寺の観音めぐりを計画通り実施していただいた超人・雨宮氏には、感謝・感謝です。心に残る、楽しい有意義な旅行ができたのは、同行の皆様のおかげです。重ねて御礼申し上げます。